

ならないための運動」こそが必要と考えて地域医療を展開した。このため草の根検診、成人病（当時）・糖尿病予防のための検診を積極的に行った。さらに住民に対しては「健康は自らが守る」という思想の普及を目的とした講演活動を行い啓発に努めた。

一九六四（昭和39）年に長野県国保直診医師会初代会長となる。国保直診とは国からの補助金を得て市町村が設立した施設のことであり、吉沢はここを地域医療展開の場と考えた。

彼の手足となって働いたのは国保施設や行政の保健師（当時は保健婦）と住民の中から任命される保健補導員であった。一九七二（昭和46）年には佐久市保健補導員連合会結成、これは後に長野県保健補導員委員会等連絡協議会結成へとつながる。



吉沢が診察する集団検診

二〇〇五（平成17）年に長野県は長寿日本一（男性第1位、女性第5位）となったが、40年前は男性9位、

女性26位であり、さらに昭和30年代の佐久地域の脳卒中死亡率は全国でも最悪の水準であった。

吉沢らはモデル地区を設定してこの地域で何が問題なのかを研究。その結果「家の中が寒い」「塩分摂取量が多い」などの問題点が明らかとなった。そこで吉沢が中心となって保健師の指導、保健補導員の育成などを通じ減塩運動、一部屋暖房運動などを展開した。

これらの運動が功を奏し、昭和40年代に入り佐久市では脳卒中が激減したのである。佐久が健康長寿のまちとして全国的に有名になった礎は、佐久病院の若月院長と共に、予防医療の大切さを説いた吉沢らが築いたと言っても過言ではなからう。

一九七四（昭和49）年七月、佐久市は住民の健康増進と保健衛生の向上を図るため、健康管理センターを設置、吉沢はその初代センター長に就任した。その二年後、佐久市に対し第28回保健文化賞が授与されたが、これは吉沢らの働きに対する評価と言える。

### ●文化活動

吉沢の医療・保健分野での功績は多岐にわたり、かつ多大なるものがある。だが吉沢について語る時さらに文化的な側面を忘れる訳にはいかない。

父である吉沢三郎が生前に収集し、死後吉沢が受け継いだ中国陶磁器は、質の高いコレクションとして専門家の間でも有名であった。吉沢は自宅の敷地内に収

蔵庫を作ってこれらを展示していたが、より多くの人々に公開し、研究に役立てる目的で一九九〇（平成2）年それらを佐久市と軽井沢町とに分けて寄贈した。佐久市立近代美術館には明から清時代（14世紀以降）、軽井沢町立歴史民俗資料館には漢から元時代（14世紀以前）の陶磁器が展示されている。

またアララギ派の歌人として生涯にわたって作句を続け、『佐久たかはら』『佐久野』『佐久春秋』『春秋残日吟』と四冊の歌集を刊行している。このうち第三歌集『佐久春秋』で一九九三（平成5）年、佐久文化賞を受賞した。

二〇〇八（平成20）年一月九日、死去。生前よく糖尿病の患者相手に「一病息災」ということを説いていたがその通りを実践し、糖尿病、心筋梗塞の持病を持ちながら満93歳の長寿を全うした。

（仲 二元司）

### 参考文献

- 吉沢國雄業績集編纂委員会『吉沢國雄業績集』
- 佐久市立国保浅間総合病院開院30周年記念誌編纂委員会『佐久市立国保浅間総合病院開院30周年記念誌』
- 長野県国保直診医師会・長野県国民健康保険団体連合会『地域医療』

## 佐久の先人たち<sup>35</sup>

### インスリン自己注射への 道を開いた医師

よしざわくに お  
**吉沢國雄**

(1915~2008年)



インスリン自己注射の保険適応に尽力するなど長野県の糖尿病医療の礎を築いたパイオニアである。また保健・予防活動にも積極的で、住民への啓発活動、人材育成から診療にいたるまで真の「地域医療」を実践した。

#### ●浅間病院初代院長として

吉沢國雄は一九一五(大正4)年、埼玉県比企郡吉見町に生まれた。太平洋戦争が開戦した一九四一(昭和16)年に東京帝国大学(現東京大学)医学部を卒業後、陸軍短期現役軍医中尉として中国大陸へ出征する。戦後しばらく大陸に残り医師として仕事を続けたが、共産党軍による監禁なども体験し、一九五四(昭和29)年には帰国して東京大学医学部冲中内科むなかほに入局した。その頃北佐久郡浅間町(現佐久市)に国保直営の病院を作ろうという動きが起こった。様々な困難を乗り越え、院長として東大から派遣されることになった吉沢は、数名のスタッフとともに碓氷峠を越え、一九五九(昭和34)年に佐久の地に赴任した。

#### ●糖尿病外来の開設

開院式当日には浅間山が噴火し、吉沢は日記に「浅間山の祝砲」と書き留めている。今では国内の糖尿病人口は一千万人を超え、国民病となった糖尿病ではあるが、浅間病院開設当時はまだ「ぜいたく病」と言われるくらい珍しい疾患であった。しかし吉沢は佐久地域の実態調査から、農村地域でも東京と同等の糖尿病患者がいることを証明し、一九六〇(昭和35)年には長野県で初めてとなる糖尿病外来を開設した。今や二千人近い通院患者がいることを思えばまさに先見の明と言えよう。外来開設の翌年には日本糖尿病協会の長野県支部を立ち上げ、浅間病院にも分会を作った。糖尿病患者会活動を活発に行なった。



開設記念式典時の浅間病院

さらに糖尿病領域への吉沢の大きな功績としてインスリン自己注射への道を切り開いたことが挙げられる。糖尿病治療のためのインスリン注射は長らく保険が適用されず、自己注射もできなかったため、患者は建前上毎日通院して注射を受けなければならなかった。吉沢は「長野方式」と呼ばれるやり方で自己注射への突破口を開き、それが一九八一(昭和56)年の保険適用へとつながった。

これら長野県における糖尿病治療のパイオニアとしての業績を評価され一九九二(平成4)年、日本糖尿病学会から、糖尿病学の進歩ならびに糖尿病に関する啓発、福祉に著しく貢献したものと与えられる坂口賞が授与された。坂口は吉沢にとって東大の医局の恩師に当たる。

#### ●脳卒中多発地域の汚名返上

吉沢は赴任当初から予防と診療の一本化、「病気に



昭和53年7月 糖尿病教室